

清水文雄先生をお送りする

わたくしどもの敬慕してやまない清水文雄先生が、この三月末で定年ご退官になる。

この学園の国語学・国文学・国語教育学の生みの親・育ての親とも申すべき先生がたを相ついでお送りしてきて、ことしまた清水先生をお送りしなければならぬ。まことに痛惜のきわみである。

ここに、清水先生の歩まれた道とそのご業績の一端をしるして、先生のご学恩に思いをいたすよすがとしたい。

清水文雄先生は、明治三十六年熊本県球磨郡五木村の川辺川のほとりにお生まれになり、この川の豪宕たる川音を聞いて幼年期をお過ごしになった。先生は、この「河の音」のリズムが先生のご性格の一要素になっていると、かつてお書きになったことがある。

明治四十一年、現在の先生のお住まいの近くにご転住になり、ここで少年期をお過ごしになった。この時期に、先生は短歌・俳句・詩・小品文などを諸雑誌に投稿され、しだいに文学への眼を開いていかれた。

大正十四年、広島高等師範学校にご入学、昭和四年ご卒業、ひきつづき広島文理科大学に第一回生としてご進学、同七年ご卒業になった。この時期には、多くのすぐれた先生がたのご教導を受けられたが、わけても高師時代齋藤清衛先生に、文理大時代土井忠生先生に、それぞれ指導教官としてご指導を仰がれたことは、先生のその

後のご研究にとってまことに重大な意味をもつものであったかと拝察される。清水先生は、天性の詩人性のうえに、両先生のそれぞれにすぐれた態度に学ばれ、方法を摂取されて、先生独自の学問を構築していかれた。ちなみに、先生の高師でのご卒業論文は、「正岡子規における和歌革新の第二段階」で、これは「国漢文叢書(五)」として星野書店から刊行されている。また、文理大でのご卒業論文は「和泉式部集の研究」で、これまたその要旨が雑誌「文学」に掲載された。いうまでもなく、和泉式部のご研究は先生のライフ・ワークであり、昭和三十六年の学位請求論文「和泉式部歌集の研究」に結実していった。その後も、先生はこのご論文に彫琢の手を休みなく加えておいでになる。

昭和七年、文理大をご卒業になるとともに上京され、成城学園成城高等学校に昭和十三年までお勤めになった。この成城時代に先生のご研究の拠点となったのは、蓮田善明・池田勉・栗山理一の諸氏とともにお出しになった同人研究紀要「国文学試論」(第一輯―第五輯)および「国文学試論批評篇」(二冊)であった。

昭和十三年四月、学習院に転じられ、同二十二年四月末までそこにお勤めになった。苛烈なる戦時下、敗戦による混乱の時期に、民族の運命をわが身のそれと観じつつ、先生は言うに言われぬ苦悩を重ねられたにちがいない。しかしそのような困難の重大時期であれはあるほど、先生はひたすら文学研究と教育のことに一身をなげう

たれたようである。昭和十三年には前記同人諸氏とともに「日本文学の会」を結成され、月刊誌「文芸文化」を創刊された。本誌は、戦争がいよいよ苛烈をきわめるにいたって、昭和十九年八月をもって終刊のやむなきにいたっているが、通算七十冊にも及んだ。学習院時代の先生は、この雑誌を拠点にして、毎月何かは書くというきびしい課題を自らに課して、つきつきとみずみずしい論文を発表された。「式子内親王」(五回)・「衣通姫の流」(十二回)などがそれである。また、この時期には、「女流日記」(文芸文化叢書)昭和十五年七月、子文書房)・「韃靼漂流記」(新文庫) (昭和十七年一月、春陽堂)・「海ゆかば——歴代愛国和歌集」(新文庫) (昭和十七年三月、春陽堂)などの単行本、「和泉式部日記」(岩波文庫) (昭和十六年七月)なども刊行なされた。

この時期の先生については、垣内松三・斎藤清衛・久松潜一・西尾奥各先生方とのご交誼、佐藤春夫・保田与重郎・伊東静雄・三島由紀夫等の諸氏との出会い、東京大学のご教育など、書くべきことは多い。しかしさいわい、呉市の「火の会」の同人誌「バルカノン」(第二十二輯) (昭和42・2・11、呉市宮原通り七丁目一六笹本方 火の会刊)に「文芸文化」についてのきわめてゆきとどいた特集がなされているので、ここでは蛇足を加えることはひかえさせていただくことにしたい。

昭和二十二年「敗戦による周囲の状況の急変に伴う精神の不安に堪えず、郷里の山河の間に身を置いてしばらく安息の時を持ちたい」という切なる欲求から(先生の略年譜のおことば)、広島にご帰住になった。そこにはまた、「原子爆弾で廃墟となった、青春の故地広島への愛惜の情もまじって」(同上)いた。先生にとつて、敗戦を境とする人々の豹変が、どんなに大きな打撃であったかは、想像にあまるものであった。こうした中で、先生が何をみつめ、何を考えてこられたかは、ご近著「河の音」に収められた随想からお察

しすることができる。

広島にお帰りになった先生は、広島師範学校・新制広島大学教育学部東雲分校教授を経て、昭和三十一年、東千田の教育学部国語科主任教授としておいでくださった。昭和三十九年秋からは付属小学校長も兼任され、一日として席のあたたまるひまのない激職にあられた。この間、先生は、昭和三十一年には岩波文庫「和泉式部歌集」を校訂・出版され、また同三十六年には「和泉式部歌集の研究」を広島文理科大学にご提出になり、文学博士の学位をお受けになった。さらに、昭和三十二年「歌まなび——王朝的教養序説」、同三十三年「をりふし・きりめ」の論」、同三十七年以來「古典語ノート(一)」等の、国文学を基礎とした古典国語教育史研究・古典教育研究の独創的な論稿をご発表になっている。国文学と国語教育との関連・統一を、論としてだけではなく、研究そのものとしてお示しいただいたのである。

思うに、先生のご学問は、いつも先生ご自身の「いかに生きるか」という問題と切実につながってきた。先生は、文学を通じて、日本民族の根源的な精神をさぐるうとされた。しかも、その処理の方法においては、決して主観におはれることがなかった。文学を、もつとも本質的なところにおいてとらえられ、その研究を進められた。先生のご学問は、まさに本質を問う学であった。

先生の温雅で包容力のあるお人柄については、先生にお教えをいただいた人みな共通して感じているところであろう。先生は、決して自己を他に強いることをされなかった。ひとりひとりの個性を尊重され、じっと見守ってくださいました。

先生はさいわいご退官後も広島においでくださる。先生は、教子が今までどおりしばしば門をたたき先生の平安を乱すことをお許し下さると思う。先生のご学問に改めて深く感謝申しあげるとともに、先生のご多幸を心からお祈り申しあげたい。(大槻和夫)